

人から人へ伝茅葺きに夢中になって六十余年

茅葺きマイスター 大石辰夫さん・佐藤喜一さん

今では珍しくなった茅葺き屋根ですが、仙北市は、羽後町と並び全国の中でも茅葺き屋根が多く残るところです。

郷愁や手仕事のぬくもりを感じさせるこの屋根は、維持管理に相当のお金が必要なことや、専門の知識と技術を持った茅手（かやて）と呼ばれる茅葺き師の不足などで、年々その数が減ってきました。

そんな中、仙北市では茅葺きマイスターに認証された二人の茅手を中心に、技が若者へ伝承されています。

その一人、大石辰夫さん（八三歳）は本間恵介さん（三三歳）に仕事を教えながら、年間、十〜十二軒ほどの仕事を手がけています。「学校出てすぐ佐藤留治さんという茅手さ見習いに入って、佐藤喜一さんと一緒にがんばって仕事を覚えしました。最初はおっかねがったよ。危険なこともあるから四、五年は、ずっとこんなところで働かねのがなって思ってたんだ。なんでも、だんだんに仕事さ熱が入って夢中になれば、おっかね気持ちは忘れるもんだっけ。おもし



現場仕事の合間に串を作ります。串は差した茅を留めるストッパーの役割の道具。ナラの木を裂いて細くし、中心を木槌でたたいてねじりながら回転させます。女性が髪を結うときに使うUビンの要領で茅に差しします。

れぐ楽しくなってくる。難しい仕事は、まず、よく見て『何とすれば上手くいぐがな』って考える。勉強になったのは、金足の奈良家を二八〇年ぶりに総葺き替えしたときだ。中で火を焚いた（囲炉裏）家は丈夫だということを目の当たりにした。材木を締めた縄が煤で真っ黒になってハリガネみでつたくなってた。これなら崩れないと驚いたことがあります」。

仕事に夢中になるという言葉に、大石さんの六十余年の仕事ぶりと気概が見えます。

「若い人に教えるときは、初めは手を取って教える。あとは忘れたら聞け。んでねば覚えね。本間くんもマジメで『何でもいいから仕

事させてくれ』って言う。何の仕事でもマジメに正直にやればいい。次の現場は田沢湖の一人暮らしのおばあさんの家の（茅の）差し替えです。なんども、その前に串作らねがったな」。大石さんの指示に深くうなずく本間さん。そんなやりとりから、茅葺きの技だけではなく心も引き継がれていることが感じられました。

「茅葺きマイスターとして、新聞等に紹介されてから、現場で『あなたが大石辰夫さんですか』と挨拶されたんし。何とも言えない気持ちでした。市民の皆さんのおかげです。ありがとう」。市民の皆さん宛の感謝の言葉が心に残ります。



佐藤喜一さん(82歳)は、3人の弟子と5月19日に西木町門屋の門脇さんの茅葺き屋根の大仕事を終えました。茅葺き工事への助成金制度を設けている自治体もありますが、仙北市には導入されていません。次の現場は武家屋敷の石黒家。5年前に総葺き替えをしましたが、この冬の豪雪で構造材が折れ、その工事のために一旦屋根を外し、工事終了後に再度屋根を葺きます。佐藤さんの60余年の経験でも初めてのケースとのことです。

